

Love the Way You Live

For adult only

mechi

その客が初めて来たのは、確か3週間くらい前。サマー・タイムになつたばかりの4月の頭だつたと思う。

初めて現れた日は、21時前に来て、22時過ぎにはいなくなつたことくらいしか覚えてない。なんせ、春の訪れと共に人々は夜に繰り出し始め、一見の観光客も目に見えて増え、客足が賑わい始めた時期だつたからだ。

次の週。確か彼は、週頭と金曜日の2度、来店した。うちは土日休みだから、開放感に包まれた金曜の夜はできるならさつさとクローズしたいのが本音だ。閉店時間は25時だが、彼は食事を終えた後で、22時半頃までひつそりとお茶を啜りながらペーパーパックを読んでいた。

うちは夜間営業が売りのカフェ・バー兼ダイナーで、客の多くは仕事帰り、遅い時間は夜遊び達のたまり場になる。つまり、金曜ほど客が遅くまでやつてくるもので、結局完全に閉店しきれるのは26時になつたりする。そんな浮かれた店内で、これまでと変わらず大人しく過ごして帰つていつた彼は印象に残つた。

その翌週。彼は3度、現れた。

20時半頃に来て、注文は毎回ほうれん草とチーズのミートパイと、グリーンティー。そしてコーヒーを頼んでペーパーパックを読み始めた後で、最後にホットチヨコレートを飲んで、22時半頃帰つていくのを把握した。

そして今週。水曜を除く月・火・木・金の4度現れた彼は、これまで通り20時半頃現れ、いつもの注文で食事を終えると読書をし、ホットチヨコレートを飲んでから22時半頃に帰るパターンで、それが彼の日課として確立したように見えた。

その金曜。22時半に彼が帰つた後で、俺はバイトのバーに声をかけた。

「なあ、あの客、どう思う？」

「どの客？」

ビーが彼のテーブルから回収したマグを顎で指すと、彼女は左右合計6つのピアスが刺さつた眉をひそめた。